

## 草は牛の餌と堆肥になる資源

里草会顧問 福井正樹

一年生になった春から、竹の背負い籠と鎌が用意されて、毎日この籠一杯草を刈るよう言われた。草は牛の餌でもあるし、食べなくても牛に踏ませて、糞尿と混ざって発酵し堆肥にする。化学肥料のない農耕が始まった昔から、草は農地を肥沃にするために必要な貴重な資源なのだった。

資源であるから、草を刈る権利のある場所が決まっている。農家が草を刈ることができるのは自分の田畑の周囲と、そこに至る農道、また水を引いてくる水路である。これらは耕作者みんなで維持管理しなければならない場所だ。私はまだうちの田畑の所在地もよく判っていないし、勝手によその草を刈ってしまうかもしれないので、共同の草刈り場でしか刈ってはいけないと申し渡されていた。

この場所は村では二か所しかない。上の部落との間に、山を崩して谷を埋めて作った道路の広い法面がある。もう一つは山から流れてくる村の中心の川で、その西側は田畑に接しているので田の耕作者の権利だが、東側は山に登る荷車の通る道で、道の横は雑木林になっている場所だ。比較的長いこの川沿いの草は、土壌の性質が良いのかよく草は茂るのだが、灌木やつる草もはびこっていて刈り難かった。

いつもは上の村に通ずる道の広い斜面の草を刈ることになる。陽の当たる南側の斜面は早くから草は伸びてくるが、北側は遅い。斜面は広いので下の方の田に行く近道として斜めに細い人の歩く道があったり、ところどころに低いツツジなどのブッシュができています。春も早いと草はあまり伸びていない。左手で短い草を握り右手に持った鎌でそれを刈るのだが、鎌が滑って左手の人差し指を傷つける。血が出てくると、地面にはびこっているチドメグサをもんでその汁をつける。チガヤの伸びて来たばかりの先端は鋭くて、皮膚を突くと血が出てくるのでチブクと呼んでいた。ススキの葉のへりで肌をこすると傷ができて血がにじむ。

草を刈るとあちこちから血がにじんできて、いやなものだ。いまでも左手の人差し指は爪の根元に傷跡があるが、それ以外の指の切り傷の跡は無くなっている。当時は小さな切り傷は絶え間なかった。春の草は短いだけでなく、刈っても刈っても萎れて籠の中に一杯にはならない。背負い籠は体の左右にはみ出す大きさと、斜面に置けないので、道などの平たい場所に置いている。あちらこちらの刈りやすうなところに刈った草を纏めて置き、後で背負い籠に集めて回る。スギナなど刈りためても、乾いてくるとほんの少しの量になってしまう。

大人もここの草を刈りに来るが、その刈り跡はなめたようにきれいに地肌が出る刈り取りをする。子供の手ではそんなにきれいに刈り取れないということは、手で握る量が少ないからだろう。草の長い部分をつかんで刈ると、虎刈りのように不揃いである。草で籠が一杯になるには、草の生え具合と共にその日の天候にもよるのだった。

ある日はぼかぼか陽気で斜面の草むらで眠ってしまったらしく、夜露に濡れて気がついたら大きな月が輝いていて驚いた。山の端に上ったばかりの月の姿の印象は、目覚めた時の驚きとして今でも記憶に残っている。あわてて籠を背負って帰ったが、祖父は牛の世話などをしていて、十分草が刈れていないのを見てもこの日は何も言わなかった。普段はいっぱいになるまで刈れと叱られた。

ある時は私が草を刈っているのを、上の村に疎開している学校の先生が見下ろしながら話しかけてきた。丁寧な標準語なので答えるのがわずらわしく、早く通り過ぎてくれと思いながら、適当に首をふったりうなづいたりしていた。私の血のにじんんでいる左指を差して、そんな傷をほって置いたらいけないと盛んに言う。一緒に自分のうちに行き包帯しようとするでもないことを言い出したので、強く拒んだ。

すると私のうちに行こうと、無理やり私を引きずるようにしてつれてきた。もちろん忙しい春の日中に、誰も家に居るはずがない。何か薬をとと言われてもメンソレータムくらいしかない。それを塗ってぼろ布を裂いて括り、治るまで取ってはいけないとクドクドと注意した。左指の関節が曲がらないと草がつかめない。その人が見えなくなってしまうと、早速ほどいてしまった。草を刈って帰らないと叱られることを知らない、バカな大人がいるものだと思った。

祖父母にしても少々の傷ぐらいでは、血止めはしても仕事を休むなどということはない。私の左手の甲に、5センチくらいの傷跡が残っている。七夕の竹だったか、釣竿を作ろうとしたのか、竹の枝を払おうとして鉈で切ったものだ。竹の枝の上を持って鉈を打ち下ろせばいいのだが、下を持ったまま振り下ろしたから鉈が左手の甲に当たった。ぱっくりと甲の肉が避けて、みるみる血がにじみ出してくる。近くにいたおばさんに見せたけれども、「早く血を止めにやあ」と言った程度だ。

脱脂綿を当てて押えながら、何か月もかかったが治っていった。いまなら何針も縫う傷だが、切り傷くらいで医者に行くようなことはなかった。子供仲間でも、足ふみの脱穀機に指が触れて怪我をしたり、打ち身や火傷などもあったが、時間をかけて治していた。町には腕や足のない傷痕軍人も少なくない。空襲で生死をさまよふのに比べ、自分のミスの切り傷くらいでは、自己責任で自然治癒を待った。破傷風などで亡くなったなどということは聞いたこともなかった。

田植などが忙しくなると草刈は終わり、塗り替えられた田の畦に、畦豆とアズキを蒔くのが田植え前の私の役割だ。ちゃんと2粒ずつ蒔け、ごまかしたら芽が出るとすぐ分かって、注意された。春の農繁期が過ぎると、田の回りなどの草が旺盛に伸びるので、大人が朝露のあるうちに丁寧に刈り束ね、それを運ぶのが私の仕事になる。

秋はクズの葉やフジの葉を家じゅう総出で集め、乾燥して冬の餌に蓄える。普段から繁殖具合を観察し、葉を取る時期を狙っていた。何しろ冬中牛が食べるものを確保せねばならない。山裾のフジやクズは、薪などを縛るのに蔓を使うが、時には草を束ねることもある。今のように斜面や立ち木を覆い尽くすように繁茂することはなかった。